

天平感寶元年五月十五日の大伴家持

藤田徳太郎

今日も朝からしどろどろ五月雨が降る。生絲のやうに細い柔い雨が、にぶい光りを見せながら。庭の木々は皆しつとりと濡れて、生き／＼とした緑が濃くつや／＼かである。家持は考へ込んでゐた頭を上げて、奥深い木立をちつと見入つた。机の上には擴げられた紙が一枚、其に水莖の跡美しく半ば許り歌が書きつけられてある。靜かに音を立て、下る雨の筋を數へでもするやうに見つめてゐた家持は太い吐息をして又頰杖をつきながら眼を机の上に落した。今家持の頭腦あたまの中を往來してゐるのは尾張少おの昨きのの事である。少昨おのとさぶるさぶる子との仲はどうから知つてはゐた。併し此の頃の彼の有様は餘りの事である。もう一週間許りも自分に顔を見せない。役所の仕事はちつともやつてゐない。成程未だ若いのだからあゝした女に夢中になるのは有勝ちの事かも知れない。併し彼には都に遺してゐる若い妻があるではないか。何も知らないで獨り淋しく孤閨を守つてゐる妻の事を思つてやらなければならぬ。機械的な無味乾燥な公務を怠るのは未だ許される。夫をのみ頼みにして暮してゐる妻を忘れるやうな事はあつてはならない——何處から飛んで來たのか蠅が二匹、耳のあたりにひくいうなり聲をたて、うるさくまつはる。

家持は靜かに首を振つた。蠅は頭の廻りを大きく輪を書いて机の上にとまつた。家持は其をじつと見ながら考へ續けた——人の世を美しくするものは人情である。人情の極致は他人の幸福の爲に自己を犠牲にする事である。是は決つして難かしい事ではない極く手近かの所で行ふ事が出来る。少昨の場合だつてそうだ。少しでも自分の妻の事を思ひやるなら逆もあんな女に關係する事は出来ない筈だ。彼のあつした行ひが未だ若い彼の妻に知れたなら何んなに悲しむ事であらう。一個人の行爲が他の人を不幸にさせるなら其は大きい罪である。殊に其が最も愛しなければならぬ妻の場合に於いては——そうだ是は何うしても一度充分に意見をしてやらなければならぬ。

「おい誰か居ないか」

家持は聲高く呼んだ。未だ机の上を匍ひまはつてゐたさつきの蠅がびつくりしたやうに飛び立つた。

「何か御用ですか」

襖をあけてそこに六十許りの老人の顔が現れた。

「少昨のうちにやつて、用事があるから直ぐ来るやうに云つて呉れないか。」

「かしこまりました」

老人の顔が消れて靜かなさしみきを立てながら襖がしまつた。その襖から眼を窓の外に轉じた家持はふと思ひついたらしく筆を取つて、書きかけの紙の上をさら／＼と走らせた。其には次のやうな歌が記されてあつた。

大穴おほなな車くるま遅おく少名すくな昆古那ひこなの神代より云ひつてけらく、父母を見れば尊みこととく、妻子かみこ見れば愛かこしくめぐし、

うつせみの世の道理と、かくさまに云ひけるものを、世の人の立つる言立、ちさの花咲ける盛りにも、はしきよしその妻の子と、朝よひに笑み、笑ますも、うちなげき語りけまくは、ごこしへにかくしもあらめや、天地の神事依せて春花の盛りもあらむと、待たしけむ時の盛りを、放りゐて嘆かす妹が、何時しかも使ひの來むと、待たすらむ心さぶしく、南吹き雪消溢りて、射水河流るゝ水沫の、よるべなみさぶるその子に、紐の緒のいつがりあひて、には鳥の二人並び居、なごの海の沖を深めて、迷はせる君が心の、すべもすべなさ

ちつと紙面を見つめてゐる家持の顔からはさつき迄漂つてゐた暗いかげは跡もなく消れて晴やかな笑みさへ浮んでゐた。その眼は何處となく文字の上を走つた。やりかけてゐる困難な仕事をやつと果した時に生ずるあの心地よさが家持の胸には一杯に満ちてゐた。

「これであれが心をいれかへて呉れたなら……。」

こういふ言葉が彼の口を洩れた時後の襖があいて、さつきの老人が顔を出した。そして濡れた袖口を氣にしていたくりあげながら云つた。

「ゐらつしやいませんでした。」

「居ない？」

家持は眉と眉との間にしわをよせた

「何處に行つてゐるのか」

「ハイ、訊ねましたが分りませんでした。」

必持頭を下げておつゝ云つた。

「それでは、御苦勞だが夕方にもう一度行つ呉れ。」

「ハイ」

襖がしまると家持は舌打ちをして、庭先きに溜つてゐるにはたづみに眼を移した。そこには雨の足がこまかい波紋を眼まぐるしくつくつてゐた。

「何處へ行つてゐるんだらう。」

こう獨りごちたが、頭腦あたまにはその行き先きがはつきりと分つてゐた。そして人目も憚らず眞晝間にあひびきしてゐる二人がいまゝしく、且つ淺ましかつた。

そうしてこうした夫を持つてゐる妻が何んにも知らないだけ一層不憫に思はれて仕様がなかつた。「一体あの女の何處がいゝのだらう。」さぶる子は二三度何かの宴會の時呼んだ事があるので顔は知つてゐる。特別に美しい容貌でもないし、愛嬌があるといふのでもないし、かへつてこんな田舎に住まつてゐるだけに、都の女程の優美さ上品さがない。よく謠もうたひ、はしやいで座を取持つ事もよく取持つが、すべての調子が下卑てゐる。「何處がよくてあんな女にのぼせてゐるんだらう。」其に反してあの少昨の妻は少し内氣ではあるが、併し優しくしとやかで、顔も美しく、年も若い。「あんな女などに夢中になるよりは色々な點で勝れてゐる自分の妻を思つた方が何れ程い、か知れやしない。」併し家持には少昨の必持が分らないでもなかつた。血の氣の燃ゆる少昨の年頃で、妻を離れて只一人こんな田舎に淋しく暮してゐる事が出来るものではない。旅にあつては、逆も口にする事が出来ない山海の珍珠よりも只一つかみ

の乾餾の方が貴いのだと同じ理である——こんな事を考へてゐる中、家持は自分が丁度彼の年頃であつた時分の事を思ひ出した。

あれからもう十年以上になる。ほんとに月日はたつて見ると早いものだ。あの頃は面白かつた。すべての事が愉快だつた。併し今はもう中年と稱せられる年になつて萬事がいやに分別臭くなつた。あの頃には何んの遠慮會釋もなく、自分の思ふ通りに、勝手氣儘に飛びまはつたものだ。

「あゝもう一度あの年頃にかへつてみたい。」
心の底から溜息きをついて彼はつぶやいた。

あの頃にはすべての若い女が美しく見えた。すべての若い女が讚嘆された。道ゆきずりに女車に出會ふと、きつとその中をのぞいて見たものだ。今の妻は少ひさい時からのいゝなづけであつた。彼女も自分も年頃になつて其ど知つた時から、いやそのすつと以前からほんとうに互ひに相愛してゐた。彼女はその全身全靈をあげて私にまかせた。私も亦彼女の爲には何んな事をも辭せなかつた……そう、彼女が手紙の端に書いて自分によこした歌の中にはこんなのがあつた。

玉ならば手にも纏かむをうつせみの世の人なれば手に纏きがたし
又自分もこんな歌を贈つた事を覚えてゐる。

夢の逢ひは苦しかりけり驚きてかき探れども手にも觸れねば

自分達はこんなに迄互ひに愛してゐたのだ自分は都に居た。彼女は都から僅かしか離れてゐない坂上の里に母と共に住でゐた。そして彼女は世に二なきものとして自分を慕つてゐた。然るに自分は何うであ

つたか。果して彼女に身も靈もすべてを捧げてゐたか？否々今から考て見ると随分ふしだらな事をしたものだ。私は多くの女に文をやつた。又多くの女からも熱情のこもつた文を貰つた。笠ノ女郎いらつめ紀ノ女郎いらつめ安倍ノ女郎、數へて見ると幾らもある。皆私を愛してゐたやうに思はれる。私も彼女達を愛してゐた。併し彼らをもてあそびものにしたといふ非難は免かれる事が出来ない。あの女の中には私の胤を宿したのもあつた。私は自分の血を分けた子供に對して父たる責任を盡したか？みもごつたといふ事を知ると私はそのまゝ女を捨てゝしまつた。それから訪れもしなければ、便りもやらなかつた。女からの文は打捨てゝ見もしなかつた。そして花から花へ飛んで行く蝶のやうに私は他の女へと愛情を移した。あの頃自分は未だはち甘になるかならないかの時分で思慮分別は藥にしたくもなかつた。とはいへ今から思ふと何んといふ情けない自分の心であつたらう。私の關係した女の多くは、今は皆身をかためてゐる。

もう赤の他人も同じ事である。然るにその時分から今に至る迄こんな夫に温かい愛情をいつも變らず注いで呉れた妻に對しては全く感謝の言葉がない。此の事だけでも私は幸福である。併し私は妻に對して何れ程の務めをしたであらうか。何れ程の慰さめと喜ばしさを與へたであらうか。自分は妻に對して暴君たいらんでこそあつたが決して妻にのみ愛情を注ぐやうな善き夫ではなかつた。しかも、しかも——
彼は心の中に何んともいへないこそばゆさを感じた。

——その自分が今で少昨のあゝした行ひを非難してゐる其を憤慨してゐる。匡正しやうとしてゐる。彼は毛虫が腹の中を匍ひまはつてゐるやうな氣持がして、無意識に立ち上つた。丁度その時靜かな、併し若々しい足音が次の部屋にして、間の襖をがらりとあけて一人の青年が現れた。其を見ると家持は、

たどたどししながら押しつぶされるやうに坐つた。

「少昨でございます。」

天氣のいゝバスが雨にしめつた空氣を震はせた。

「久しく會はなかつたな」

平靜を装ひながら家持が言つた。

「ちつとばかり私用があつたものですから……」

と少昨は言葉尻を濁して言つた。

「少し話たいことがあるから呼んだのだ。まあこつちへはいれ。」

家持の眼が少昨の顔の上を走つた。と視線があつたので慌てゝ家持はその眼を落した。何んだかさつき考へてゐた事を見すかれそうな氣がしたので。

少昨は顔を赤めながらその傍らににじりよつた。隠そうとしても隠す事の出来ない酒の香がする。

「他の事ではないが……」

家持は言ひさして口ごもつた。頭腦あたまの中には何を云はうとしてゐるのかはつきり分らなかつた。羞耻に似た感じ、たよらないやうな氣持が心の何處かにあつた。

「……………」

少昨はちつと疊の上を見つめてゐる。

ふと家持は未だ机の上に擴げたまゝであつた歌の書いてある紙を取り上げた。

そして其を少咋の前に置いて

「是を讀んでごらん」

少咋は不審想にちらと家持の顔を見て、自分の前に置かれた紙を取りあげた。家持は庭の木立をぼんやりと眺めた。梅雨の空は濃い灰色をして、一日中陰鬱な色をみながらせてゐるが、其でも漸く日が暮れかゝつたと見えて少しあたりが薄ぐらくなつたやうに思はれる。

家持はその灰色の空を見上げて是が日和ならあの夕方の美しくしい二上山が仰がれるのと思つた。

「分りました。」

ちつと家持の歌を讀んでゐた少咋は此の時顔を上げて靜かに云つた。

「エッ？分つた？」

家持はびつくりしたやうにふりかへつて少咋の顔をちつと見つめながら云つた。少咋が何を言つたのか分らなかつたので。

「御教訓がよく分りました。」

少咋は顔の筋一つ動かさず平然として、低い力強い聲で繰り返へした。

「ほんとに分つたのだネ。私の心が了解されたといふんだネ。」

家持は漸く今の自分の立場をはつきりと了解したので、曇みかけるやうに言つた。

「お前はおつと妻の事を思つてやらなければならぬ。お前が淋しければお前の妻も矢張り淋しいのだ。私達は自分を最も愛してゐるものを知らなければならぬ。そして其のものを何よりも愛さなけ

ればならない。此の意味で私達が妻を愛さない事は人間として最も大きい罪なのだ。」

彼は己れの言ふべき事をはつきりと把握したので、今はもう躊躇せず諄々として解いた。自分の若い時の記憶はいつの間にか姿を隠して、只、今自分の言つてゐる事に自ら感激しながら熱心に言つた。少昨は黙つて其を神妙に聞いてゐた。

「——其ではその歌を持つて歸へつて最う一度靜かに考へて御らん。」

家持はそう言つて口を閉ぢた。そして又庭の木立に眼を移した。何んだか自分の言つた事が未だ足りないやうな、といふよりも、寧ろ力と眞實味に乏しいやうに感じつゝ。

少昨はだまつて膝の上に置いてあつた紙をたゞんだそして靜かに立ち上つた。

「では失禮致します。」

少昨の白い姿が襖のかけにかくれると、その跡には濃い夕闇が流れ込んで來た、そして忽ちのうちに部屋の中に充滿してしまつた。皆何處に行つたのか、誰も燭台に火を點けるものもない。併し家持は只獨りその闇の中に坐つてちつと暗黒を見つめてゐた。今は、その心には、少昨もない、その妻もない、自分の最愛の妻もなければ、青年時代の追想もない。過去現在未來を超越した悲哀感、自然の奥底より浮び來る無限の哀愁の念のみ胸にみちみちて、彼はいつ迄もそこに座つてゐた。雨の音が絶えまなくしとくと靜かな闇の中をぬうて聞けた。